

# ダークライダー黙示録

希望の忍者

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

あらすじ : 一人の天災と呼ばれし女性が……

『IS』正式名称は『インフィニット・ストラトス』……『無限の成層圏』と呼ばれし物を開発をするも『IS』には致命的な欠陥があった。

それは……女性にしか扱えないと言う事であった。

それで、女性にしか動かせない事をいい事に

男尊女卑だんそんじよひならぬ……女尊男卑じよそんだんひが当たり前の社会へとなってしまった。

その社会の中で、IS世界大会で優勝した女性最強の称号《ブリュンヒルデ》を手にした女性……織斑おりむら 千冬ちふゆ。

最強の女性を至高とする女尊男卑の連中は織斑 千冬の弟である織斑 一夏いちかを邪魔者として排除しようと学校どころか、街全体に圧力をかけ、追害しようとするが、一夏は認めてもらうために日々努力するがそれを女尊男卑のクズが邪魔をする。そして、IS世界大会のモンド・グロッソで密かに、誘拐犯と取引し、一夏を誘拐し抹殺する。

今の世界の現実を知り、人間を醜く、浅ましく欲深い愚かな種族と一夏の中では変わっていた。世界に絶望して……全てを破壊する為に、全てを否定する為に、

そして一夏はこの世界の憎しみで異世界から、ダークライダーたちを自身の体に宿し、誘拐犯たちを皆殺しにして、女尊男卑の連中も全て、殺して行き、IS学園や元姉の織斑千冬さえも敵となり、

ダークライダーとして生きる物語である。

# 目次

プロローグ

世界の絶望と闇の力の名はダークライダー

1

神の列車×今後の方針×そして過去へ

14

## プロローグ

### 世界の絶望と闇の力の名はダークライダー

インフイニット・ストラトス 通称『IS』その存在は、宇宙空間を想定して開発されたマルチフォーム・スーツである。

開発された当初は全く注目もされずにいたが… IS最初の開発者のである 篠ノ之 束は日本を射程距離内とするミサイルを配備された軍事基地の全てをハッキングし、2341発のミサイルを日本に向けて発射した。その約半数を撃ち落とした謎のIS 『白騎士』……。それを捕獲もしくは撃破しようと各国が大量に送り込んだ軍事兵器だが、戦闘機や戦闘艦などの大半は無力化され、後にこの事件を『白騎士事件』と呼ばれる様になり、従来の兵器を凌駕するISの圧倒的な性能により、宇宙空間への発展から軍事兵器へと転換してしまい、各国の抑止力となった……。

更にISには欠点があった、それは 女性にしか扱えない という事であった。その欠点と旧型の兵器と人間の欲望により、男女の立場が変わり果て、男尊女卑ならぬ、女尊男卑の風潮が浸透してしまっただけ……。

そんな腐った女性の醜い欲望が渦巻く社会に一人の少年がいた……  
名前は織斑 一夏…… ISの生みの親である……篠ノ之 束の数少ない友人である 織斑 千冬の実の弟である……

織斑一夏は姉に追いつきたくて必死に努力しても誰からも認めてもらえずにいた。だがそれでも彼は、自分を信じて努力したが……第1回ISの世界大会であるモンド・グロツソで姉である千冬が総合優勝と格闘部門で優勝し、世界最強の女性の称号を得たと同時期に周りの人間は『織斑千冬の付属品』『織斑家の出来損ない』としか見ないよ

うになった……………。

『俺は織斑千冬の付属品でも、出来損ないでも無い！俺は俺だ！』

一夏はどんなに、努力しても周りの反応と態度は変わらず……………それはまさにドロドロとした負の感情が一夏の周りを底なし沼の泥の様に渦巻いていた。

『織斑千冬様の弟ならこれくらいは出来るでしょ！』『あんたの姉の織斑千冬はこれ位は簡単に出来たぞ！』『姉に出来て何故弟のお前は出来ないんだ！』『お前がいい成績を取れる筈が無いだろう！カンニングしたんだろ！』

それでも周りの人間は俺を否定する。一夏は徐々に心が崩れかけていた。

——しかし、それには闇の深淵とも言えるような深く暗く黒い陰謀が隠されていた。それは織斑千冬を尊敬を通り越して崇拜するレベルに達している女尊男卑の巣窟とも言える女性権利団体の一部により、織斑千冬を崇拜する女性にとつては……………織斑千冬の弟で、それも男の織斑一夏を排除して織斑千冬をいつまでも穢れなき輝かしい女性へと保ち続ける為、ISを使いこなす織斑千冬を女尊男卑の象徴にするには弟の織斑一夏を追い詰めて排除しようと考えたていたのであった——

女性権利団体の奴らは……………織斑一夏との関係性の少ない人物から大きなアタッシュケースに多額の金額という報酬をチラつかせながら言葉巧みに先導し、最初に悪質な手口から始まりそこから悪意が徐々に広まり、更には同じ考え同じ志を持つ者も浸透していき、それはねずみ算式に増えていく。

そして増えていった織斑一夏否定派はもう……………織斑一夏の親しい友人以外は染まっていった。

女性からは女性権利団体と同様の考えで、出来損ないの一夏が今のご時世の象徴でもある織斑千冬の弟である事に不満と相応しくな

いとの否定の声を……

男性からは女尊男卑に染まったご時世の象徴の弟である一夏に女尊男卑による怒りと憎悪の筋違いの矛先を向けるが浸透したどの男性もそれを否定しなかった。

男性達も女尊男卑の世界では、女性に手を上げると自身に大きいデメリットが来る事を恐れ手を出せないが、象徴の出来損ないの弟なら手を出しても問題ならぬだろうと思ひ、女尊男卑による溜まった怒りや哀しみや憎悪等の感情をぶつける。

しかし、一夏はそれでも気の許せる友人達に支えてもらいながら、今のご時世を必死になつて努力し強く生きていた。

そんなある日……ドイツの第2回モンド・グロツソにて千冬の応援の為にドイツまで訪れた時に思ひ知らされた。

一夏は今現在とはある港の廃倉庫の中にある椅子に縛られた状態でした。そんな事になったのは遡ること数時間前……織斑千冬の観戦をしている途中であつたが、俺はあそこには居たく無かつたからこの場から出た。そこで待つていたのは黒いサングラスと黒いスーツを着た男性複数人であつた……。どうやら一夏は織斑千冬の優勝阻止の為に誘拐された様でいまは何処かの港の廃倉庫に居て、誘拐を実行した男性達とその中心にいる女性は誘拐に成功したと言つていて祝杯を上げていた……。それが今現在に至る。そんな時に作戦が不安なのか、1人の男が疑問を投げ掛けた。

「けど……良かったのか？此奴は出来損ないつて言われているんだぜ。」  
女性「大丈夫でしょ……織斑千冬は家族想いつて言うし、出来損ないの弟でもたった一人の弟なのよ、助けに来るわよ。」

誘拐犯達は出来損ないの俺でも助けに来ると言つていたが……暫く

してそれは、全く違う結末となる

「おっ?!おい!?織斑千冬が決勝に出ているぞ!?!」

女性「何ですって!?!ちよつと!?!ちゃんと政府には連絡はいれたのよね?!」

「ああ…確かに政府に連絡をいれたぞ!?!」

「オイオイ…じゃよ、織斑千冬は弟を…家族を見捨てて富と名声の方を選んだってわけかよ!」

「ちっ!やつぱりアイツも所詮は女尊男卑の主義者かよ!?!」

「じゃ…どうするんだよコイツは…」

女性「…少し様子を見ましよう。幸い、此処の場所はまだ知られてないから…もしかしたら連絡が伝わって敗けてくれる可能性はあるわ」

「しかし!それなら時間稼ぎで俺達の居場所も突き止められる可能性が!」

女性「ぐッ…確かにそうね。男のアンタに言われるのは癪けど仕方ないわね!」

「だったらどうする此奴…どつかの研究所にでも引き渡すか?あの織斑 千冬の弟なんだし何かと理由を付ければ高く買い取ってくれるかもだぜ?」

女性「…いいえ。そんな事より、私はムカついているからとつとと此奴を始末するわ!」

「私怨かよ……………」

誘拐犯の男性は女性の私怨に呆れつつ、誘拐犯の女性はフランスの第二世代ISである…疾風ラファエルリヴァイの再誕を装備し、銃口を一夏に向ける。

女性「残念ね…あんたのお姉さんも私と同じ、女尊男卑の主義者みたいだったようね…」

一夏「(やつぱり…千冬姉も口ではなんとでも言える人間だったんだな。)俺は地獄でもアンタらを怨み続けて呪い殺して殺るよ!」

女性「そお…でも怨むんなら、貴方の姉と女尊男卑となった世界を

精々怨む事ね。それじゃさよなら…。」バツアアン

一夏「……………」ドサツ

誘拐犯の女性ご撃った銃は一夏の身体を中心に縛られていた椅子ごと貫通し、周りは血と肉が飛び散る…。そして一夏は糸が切れたように崩れ倒れる。倒れた一夏の周りは血溜まりとなつて横たわっている。誘拐犯達は一夏を始末した事で長居は無用つて事でこの場から撤収使用としていた。だが…………倒れている一夏は想っていた事は…………。

〈精神世界〉

一夏『まだだ！まだ諦められない！生きたいんだ、俺は俺でありたいから…だからこんな所で死ねない！俺は生きたい！命を諦めらめてたまるか！誰からも認めてもらえず否定され続けられたのに此処で死ぬなんて…………巫山戯んな!!俺は此処で諦めてたまるか!!』

???'『ならばお前はどうしたい?…………』

一夏「えっ!?!……………」

一夏が見た者達は、どれも人の形をしているが、仮面の様な物で顔を覆い…………ライダー服や鎧の様な様々な格好をしている者達であった。そして特徴的なのが、皆主に腰に奇妙なベルトとバックルがしてある事である。

それではまるで、特撮に出てくるような者たちである。

しかも唯ならぬオーラを感じるので正義のヒーローと言うよりは、悪の力を持つ感じの《ダークヒーロー》の方がしっくり来る感じであった。

一夏「あツ!?!アナタ達は一体!?!」

「そうだな…………俺達は『仮面ライダー』と言われた存在。それも他人の為じゃなく自分自身の為に力を使い自分自身の強さや目的や願いや欲望を求めたダークヒーロー的な…………まあ所謂『ダークライ



ダー」って言った所だな」

一夏「ダークライダー……」

「それで？」

一夏「えっ？」

「さっきの話だ。お前はもうしたいんだ？」

一夏「俺は……最初は千冬姉が助けてくれるって信じてた。約束してくれた1人にはしないって……けれどそれは偽りだった。結局……千冬姉も俺の事が要らなかつたんだろうな。」

出来損ないと言われ続けた俺を……どんなに努力しても周りの奴らは俺を認めない所か否定することばかりだ。

それに束さんが開発したISが誕生してから俺の否定の声も強くなった。それどころか俺を消し去る様な言動と行動が出てきて段々とそれは日々過ぎる毎に増していった。

俺が必死になって努力して認めてもらいたいと思ってるのに、誰も認めようとしない、寧ろ否定する一方だ。

それに、俺を誘拐した男たちも千冬姉の弟だつていう俺にこの世界の怒りをぶつけるみたいだった。

なあ……何でアイツらが俺を憎んでたのか今のこの世界をどうしてあそこまで憎いんだ？ISがあるってそんなに憎む事なのか?!!」

一夏はダークライダー達に聞くと隣同士で顔を合わせながら仮面越しだが、まるで信じられない、嘘だろ、ありえない、世間に関心しなかつたのか今まで知らなかつたのか、そんな事も理解できないのかと言う感じであった。

その中で、炎を纏った否……炎そのものである炎の巨人……【仮面ライダーコア】は一夏に言った。

『……ならば……己自身の目で見て知るがいい、この世界の今の有様を……』

そう言つてコアは徐々に黒い三枚の甲殻類が描かれたメダルと普通のパソコンよりも分厚くメタリックなUSBメモリになってゆく……そして薄緑色のMEMORYと書かれたUSBメモリは一夏の額に突き刺さりそのまま……頭の中へと入つていった。

コアが一夏に見せた映像は今のこの世界の有様である。

『ISだ！逃げろ！逃げるんだ!!』

『やめろッ！やめてくれ!!』

『アツハハハハハハハ!!いいザマね。男なんて子孫を残すだけの種植えよ。種植えはいくらでも換えがきくから後は始末して上げるわ！役に立たない男なんて必要無いんだから!!』

一夏の頭の中に流れて来た映像は何処かの紛争地域で、ISを纏った女性は男性を人間とは思ってなく、そればかりか……男だからと言う理由で、使い捨ての道具感覚で、逃げ回る男性達をゴミの様にISで殺していく映像だった。

一夏（なツ?!なんだよこれ!!）

一夏は突然の映像に驚愕と困惑した。一夏の知らない世界事情であった。

一夏「こッこんなの……只の作り物だろ？驚かせるなよ！」

「お前……これが只の作り物の映像だと本気で思っているのか？この地獄を……」

一夏は観せられた映像は只の作り物だと口にするが、全身が白く、25個の黒いスロットを全身に巻き付け黒いマントを羽織り仮面の額にはEの文字を横にし王冠を想わせ、仮面の眼は∞を模した様な黄色の複眼……白き地獄の使者「仮面ライダーエターナル」は現実を見ないガキを相手するかのように一夏に呆れていた。

一夏はエターナルの言葉を聞いて改めて映像を見る。その映像から見る女性のドロドロとした悪意は、紛れもなく本物だと実感し……怒り、哀しみ、憎しみ、恐怖、絶望などのあらゆる負の感情が頭の中で混濁こんたくした。

そこから別の映像が流れる。

『何でISなんかがあるんだよ!!何で俺の！俺達の幸せを奪うんだよ!!ISってのは!!女性権利団体の奴らは!!』

『所詮……この世は私達女性が1番偉いんだから……男なんて居る

だけで邪魔なだけよ！だから言いなりになっていればいいのよ!!」

『何故じゃ?!何故私の孫が死ななければならなかったんじや?!確かに孫は男じやが、それで殺す理由になるじやと!!しかも孫を殺した奴は無罪でスグに釈放じやと!!大事な孫を……家族を殺しておいて、罪捕らわれとは……I Sなんぞ、女性権利団体なんぞ、女尊男卑の社会なんぞ……巫山戯るんじやないわ!!』

『何でよ……私は彼を愛していたのに、私に向ける顔はいつも私の顔色を伺うばかりで、彼の笑顔を見た事が無い。女性がそんなに怖い?好きな人とも愛し合って結ばれる事も普通の女性としての幸せも持てないなんて……ホントにイヤな世界になっちゃったな……』

『くそツツオオオ!!憎い! I Sが憎い!!女尊男卑の女共が憎い!!この世界が憎い!!』

一夏は老若男女問わず、怒りや哀しみや憎しみや絶望の表情と叫び声を上げ、永遠に続く負の感情の渦が巻く様に感じた。

I Sにより女尊男卑が浸透した世界の姿を見せられた一夏は今のこの世界に憎悪した。

何よりも……この世界の現実を見ていなかった自分自身に激しく怒り憎しみ嫌悪した。

「小僧…… お前は姉の背中に縋すがって世界の有様を見ていなかった。そして己の弱さを嘆くのは悪い事ではないが……弱さを受け入れず現実を見ずそれを受け入れようとせん愚かな者は弱者と同時に弱者のままの奴だ!!お前はどうか?お前の意志や覚悟を見せてみる!!!」

血のような赫い鎧武者……【武神鎧武】が一夏に覚悟を問いかけると、一夏の眼は覚悟をキメた様に一夏は答える。

一夏「俺は……この世界を破壊する!!!」

「いいのか?それで……」

金色のギリシャ文字のΩの模して背中に黒い賢者のローブを羽織った黒い身体。

地の帝王と呼ばれる存在【仮面ライダーオーガ】は一夏に問いただす。

一夏「女尊男卑という社会がこの世界の定義なら尚更……俺は世界を破壊する!!くだらない征服欲に満たされている支配された世界なんて……明日へと続く未来なんて無い!人間は、手と手を取り合つて絆を結び繋いで明日を……未来を掴むものだ!!俺はその為なら邪魔をするヤツらを全て敵と見なし、全て破壊する!!!」

「それがお前の目標なんだな?」

一夏「ああ!!」

『『『『ならば、お前の言う世界の全てを破壊しろ!!!』』』』』

そして、ダークライダー達は皆……光の塊となり、一夏の身体の中へと憑はつていった。

「一夏よ……お前の存在を知らしめる為に、さっきの不屈きな誘拐犯の奴らを殺して血祭りにして来い!そしてお前は出来損ないと言われ続けた織斑 一夏では無く……この世界を破壊する者として生まれ変われ!!」

一夏「ああ!!やって殺るよ!!だから、力を貸してくれ!!鎧武者!!」  
「鎧武者って……ああ、今から存分に私の力を貸してやろう。それと、私の名は【仮面ライダーぶしん武神鎧武ガイムだ。【ダークライダー】としての初陣には丁度いいだろ?」

一夏「……ありがとう」

そして一夏はダークライダー達の力を宿し、魂は現実世界へと舞い戻った。

〈現実世界〉

誘拐犯達は始末した遺体を確認せずに撤収しようとしたが、誘拐した織斑一夏の死体が起き始めたのは不安の疑問を口にした男であつ

た。

「おっ、おい！あつあれ!!」指を指す

女性「何よ！始末した死体なんてどうでもいいじゃなッ い……………  
なっ!?!なんで生きているのよ!! I Sで始末した筈なのに!!?」

驚いた女性に続き他の誘拐犯も振り返ると、次第しだいに驚愕と恐怖の表情となった。そして、飛び散った血や肉片が徐々に集まりだした。そして…大きな血の球体となった。

それから、脈動する様に光りだし…そして卵が割れる様なヒビと音が入り、エレキギター音の待機音と低い声の登場音と共に果実が弾ける様な水飛沫みずしぶきを上げ、爆発する様に弾けた。

【ギューーン!!ギギギギューーン!!】

【ブラッドオレンジアームズ！邪ノ道・オン・ステージ!!】

そこに居たのは、鎧武者の様な姿で、色は血のように赫く植物状のツタの黒い模様が描かれていて、頭は伊達政宗のような三日月形のパーツがついた仮面で、頭部横のパーツは黒く、ベルトのバックルには短剣の様な形をした物と錠前に果実の断面と武器の様な絵が入っている…………。武神鎧武となった一夏は赫いオレンジの断面の刀…大橙丸・紅蓮ぐれんを取り出し、剣先を向けてこう言った。

一夏「覚悟しろ貴様ら!!絶望してあの世へ逝け!!」

女性「ふっ…ふざけんじやないわよ！出来損ないの癖にー!!」

女性は理性を捨てて斬り掛かるが…一夏は大橙丸・紅蓮を両手に持ち替え、斬り下ろす様にすると…I Sごと誘拐犯の女性を一刀両断した。それを目の当たりにした誘拐犯達は恐怖し、逃げようとするが一夏はそれを許さなかった。

一夏「逃がすかよ!」【ロック・オフ!】【ロック・オン!】

【一・十・百・千 ブラッドオレンジチャージ!!】

一夏は戦極ドライバーにあるロックシールドを取り外し、腰に掛けてあった「無双セイバー」と大橙丸・紅蓮の柄頭つかがしらと繋ぎ合わせ、ナギナタモードにし、必殺技の『ナギナタ無双スライサー』を発動すると…誘拐犯達は横に一刀両断されてしまい、辺りには一刀両断された死体が横たわっている。

そして、一夏が装着していた武神鎧武は一夏の意志とは関係無く解除され…鎧武者の代わりに身に纏った血と肉片は辺りに散らばる様に残っていた。

一夏「ありがとう…：武神鎧武。貴方のおかげだ…：。」

『気にするな…：だが、今のままではこの世界を破壊する事は出来ん! お前は私の否私達の力を扱いきれていないからな。私以外にもダークライダーの力を扱わなければこの世界を破壊する事は出来んだろう』

一夏「えっ?!?じゃどうすれば!?!」

『一夏…：…今から時間分秒が揃った時間にどこでもいいから、懐に入っている金色のパスケースを持って扉を開ける。なるべく空き巣などの人気の無い場所がいい。時間が無いならその扉でも開ける!』

一夏「えっ!?えっと時間は14：10分29秒で、懐の金色のパスケースはこれかな?」

一夏は言われた通りに懐を漁ると…：…いつの間にか懐に入っていた金色のパスケースを持って確かめた。

その金色のパスケースの中には∞とInfinityの文字が記入されていた。

一夏「Infinityか…：…この金色のパスケースを持って揃った時間分秒に扉を開ければいいんだね?」

『そうだ。後は俺様が道案内してやるだから、間違えるなよ?それと

この世界を破壊する人類の敵である破壊者となる覚悟は出来たか？」

一夏「大丈夫。改めて問われなくても……覚悟は出来てるよ」

『……そうかもうすぐ時間だ。扉を開ける準備をしろ』

一夏「ああ」

そして時は一刻と徐々に迫り、そして一夏は……

『今だ!!入れ!!』

一夏「!!」

壊れかけの扉を開け、中に入って行った。そして自然と扉が閉っていった。その後時を持って “元” 織斑 一夏は……存在ごと……この世界から消えた。

——出来損ないと言われ続けた織斑おりむら 一夏いちかは、全てに怒り憎しみ憎悪する一夏となり

受け継がれたチカラで、世界を破壊する者……ダークライダーとなった。

そして此処から始まる。ダークライダーと呼ばれし者達の後に黙示録と呼ばれし時代が、女尊男卑と言う征服欲という欲望に塗れ腐りきった人間の復讐劇が、ひとつの時代が終焉を迎え新たな時代が始まろうとしていた。

余談であるが、そして暫しばらくした後から、ドイツの部隊と共に駆けつけた織斑千冬は誘拐された弟を救う目的だったが、そこには肝心の弟は居らず……大量の血痕けっこうと誘拐犯達の真つ二つに、一刀両断にされ……斬り殺された死体だけが見つかった。こんな状況は流石に初めてなのか、一部の人間はその場で吐いてしまった。そして検査

してみた所：斬り殺された死体はISと想われる武器で斬り殺されたと判断し、他の血溜まりの血液と飛び散っていた肉片を採取し、確認をとるとそれらからは……織斑一夏の物と断定され、この血溜まりの量と肉片と死体を見れば間違いなくISで始末され、理由は不明だが：織斑一夏は、斬り殺した犯人が遺体を持ち去った可能性が高いとされ：そして間違いなく生きてはいないと断定された。それを聞いた織斑千冬は人前では凜々しいとされていたが、世界最強の女性《ブリュンヒルデ》の称号とはかけ離れている様に両膝をつき大粒の涙を流して泣き崩れていた。それは…… たった1人の大切な弟を家族を失くし、世界最強の女性とは真逆の弱々しい女性でしか無かった……



神の列車×今後の方針×そして過去へ

『INFINITESTRATOS』通称『IS』が篠ノ之 束と言  
う名の女性開発者によって開発されるが、それには致命的な欠点が  
あった。それは女性にしたか機能しないと言うことである。

そのせいで社会は、男女平等社会から一変し男尊女卑ならぬ……  
女尊男卑へと変わってしまった。

その社会の中で、1人の少年の姉のである織斑 千冬がドイツ モ  
ンド・グロツソで開催されたISの世界大会で優勝を果たし、世界最  
強の女性……『ブリュンヒルデ』の称号を手にし、その1人の少年で  
あり織斑千冬の実弟である織斑 一夏はその最強の姉と常日頃に見  
比べられ、

例えば人より出来ても「織斑千冬の弟なら当然！」「織斑千冬の弟なら  
出来て当たり前！」

例えば人より劣っていて「織斑千冬の弟の癖に手を抜いているのか!？」  
もできない？」「織斑千冬の弟の癖に手を抜いているのか!？」

人達は誰も彼を認めようとせず、そればかりか存在その物を否定す  
る。『出来損ない』と言われ続けた。そして織斑一夏は姉の織斑千  
冬の第二回IS世界大会の最中、姉の優勝妨害を企てる誘拐犯に誘拐  
された。しかし、誘拐犯と一夏は予想を裏切られる事になった。何故  
なら……織斑千冬が大会に出場していたからだ。

任務が失敗し、織斑千冬も女尊男卑だったと言う中で誘拐犯の女が  
ISを纏い、一夏を始末するも……

一夏は精神世界で『ダークライダー』と呼ばれた者達から力を受け  
継ぎ、現実世界で誘拐犯達を虐殺した。そして一夏は金色のパスを  
持って扉を開け、この世から姿を消す。

これは、『元』織斑 一夏が「ダークライダー」として女尊男卑に  
染まり腐りきったこの世界を破壊する破壊者として、戦い、殺し、勝  
ち、そして生きる物語である。

一夏は誘拐された廃倉庫から金色のパスを持って扉を開けて、そこで目にした光景。それを言葉で形容するならば・・・無。辺り一面には白い砂漠。少し目を細めるとボンヤリと見えてくる、遠くの岩山らしきもの。決して青とは言えない、若干虹色がかかった空。見える物はそれぐらいで、一言で言えば「異空間」だ。辺り一面の場所の表現をするならば、荒野が最適だろう。

そんな白い砂漠の荒野を一夏は暫く歩いていると・・・  
??? 『止まれ、一夏』

一夏の身体から40代後半程の、渋い男性の声がした。

一夏「えっ!?だッ誰だ!?!」

一夏が突然の声に驚いて声のする者を誰かと尋ねると、一夏の身体から銅色の光が現れ、それは徐々に人の形になっていく。

それは、山賊のような出で立ちに、殆ど肌を見せない継ぎ接ぎの黒や茶色の服に腰ローブを纏った、壮年の男だった。

その姿は、まるで何時も飢えた野生であるかのような雰囲気纏っている。

??? 「ああ?俺が誰かって?俺は牙王<sup>ガオウ</sup>だ」

一夏「牙王?」

牙王「ああ。お前にこいつを操縦してもらおう為に出て来てやった」

一夏「こいつ?」

牙王「ふっ……はあッ!!」

牙王は右腕を上に掲げると強い光が放たれ、一夏は思わず目を瞑る。

一夏が瞑った目を開いて目の当たりにしたのは、車両色がオレンジ色でその先頭は鰐<sup>ワニ</sup>の頭部を象った列車だった。虚ろな眼はくすんだ緑色をしているが、それでも尚その顎は全て噛みちぎり喰らい尽くす様な圧倒的捕食者の威圧感が感じられる。

一夏「わ、鰐の電車!?!」

一夏は驚愕と困惑を露わにしている間に、牙王は再び銅色の光と

なつて一夏の中へと入つていった。

牙王『コイツは“神の路線”を走り、“神の列車”とも言われた。その顎は時間を喰らう列車。〈ガオウライナーキバ〉だ』

一夏「ガオウライナー・・・キバ・・・」

牙王『そうだ。これからお前には、これに乗つて操縦してもらおう。行先は俺達が指定するから、お前はコイツを自在に動かせる様に専念しろ』

一夏「えっ!?でも電車なんて操縦したこと無いけど・・・それに電車の資格免許だつて取つて無いし・・・」

牙王『心配すんな。普通の電車とは、操縦の仕方が全く違う。まあ、取り敢えず中に入れ』

一夏「あつはい・・・分かりました」

一夏は牙王に言われて車両先頭の操縦室に入ると、そこには電車の操縦室では無く、一輪のバイクがあつた。それも、鋭い牙のような装飾の付いたバイクである。

一夏「えつと・・・これは?」

牙王『ああ。コイツは『ガオウストライカー』つつつてな。この列車はバイクで操縦ができるようになってるんだ。イイだろ?』

一夏「え?えくつと・・・」

牙王『まあ、お前はまだ青くせえガキだからな。電車の操縦なんてできる訳ねえと思つてた。そう考えたら、コレの方がマシだろ?違うか?』

一夏「ええ・・・?」

一夏はこの解答に困惑しどう答えていいかわからなかつたが、ガオウの言う通り、普通の電車の複雑な操縦よりはおそらくマシだろうという事を理解した。

牙王『とりあえず、ガオウライナーを動かせなきや、ダークライダーの力・・・ましてや世界を破壊する事なんぞ話にもならん。今は俺の

力を使え。そして、あの言葉を口に出すんだ』

すると、一夏の腰辺りから突然炎と共にベルトのバックルの様なモノが現れ、自動的に装着された。一夏「あ、そうか！」言外に込められた意思を察した一夏は金色のパスケース、『マスターパス』を上に掲げる。すると、ガオウベルトはパイプオルガンのような待機音を奏で始めた。そして一夏は、とある言葉を口に出す。

一夏「えっと・・・変身ツ!!」

一夏は牙王に「あの言葉を口に出せ」と言われ、その言葉を思い出した一夏は持っていた『マスターパス』を腰にあるベルト、『ガオウベルト』に翳す様に近づけた。すると・・・

【GAOH FORM】

パスをベルトに付けると音声がり響き一夏の体を硝子の欠片のようなエネルギーが包みこんでプラットフォームスーツとなり、銅色の装甲に白い牙の付いたアーマーが胸や肩に装着する。最後に鰐の口のようなデンカメンが頭部で複雑な変形をしてV字型の仮面に変形、噛みつくように装着された。

一夏が変身したダークライダーは、全ての敵を時間さえも喰い尽くす暴食の牙——【仮面ライダーガオウ】

牙王『よし。さつきも言ったように、ガオウライナーは“神の路線”を走る“神の列車”と言われていてな。お前が扉を開けた際に持っていたこの金色のパスへマスターパスをバイクのメーター部分の窪みに装填すれば起動する』

一夏「これか……………」

牙王にそう説明され、一夏は再び懐から金色のパスを取り出し、メーター部分の窪みに嵌め込んで掌で押し込んだ。

—— G A W W W A A A A A A A A A A Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y ——

一夏、いや、【仮面ライダーガオウ】がマスターパスを差し込んだと同時に、ガオウライナーの頭部が眼を光らせる。そして待ち望んでいたように起動し・・・大きく咆哮を轟かせ覚醒した。時間を早く喰らいたいと渴望する様な咆哮が、周りの物を吹き飛ばした。封印からの

解放に対する歓喜からの咆哮だ。

一夏「よし！いくぞ!!」

——G A W W W A A A A A A A A A A Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y——  
そして一夏は覚悟を決めたようにガオウストライカーに跨り、そのアクセルグリップを目一杯捻った。

ガオウライナーキバもそれに応える様に咆哮し走り出す。するとどうだろう。ガオウライナーの前に骨でできた炬火きよかの路線が尽ことごとく現れてゆくではないか。そしてガオウライナーはその突き進む様に走る。

一夏も最初の内は初めてのバイクの操作に手間取ったが、元より順応性が高かったのか直ぐに慣れる様になった。

暫くガオウライナーを走らせていると、牙王がある事を教えてくれた。

牙王『ガオウストライカーのメーターの処にマスターパスを入れた  
だろ。そのパスの力を使えば、ガオウライナーはどの時間でも自由に  
行き来する事ができる。例え、江戸時代の時間だろうと、太古の恐竜  
の時代の時間だろうと。そして——』

——I Sの始まりの時代である白騎士事件の時間であろう  
と、な……』

一夏「……………えっ!!?」

一夏にとってそれは、「出来損ない」と烙印を刻まれた辛い苦痛の生活の始まり。しかしその時間へ行くと言う事は、過去の自分自身の時間を変えるという事。それどころか、自身の時間が無かった事にもなるという事である。

そして同時に、『白騎士事件』が今の世界の始まりとなっている今の世界の全ての時間を変えようと言う事だ。

牙王『しかし、今のお前では絶対に白騎士には勝てない。お前は戦った事も無ければ喧嘩をした事も無い。それ処か、喧嘩の「け」の字すら知らないようなガキだ。そんな奴は戦場では役に立たず、真っ先に相手に喰われる』

一夏「ツツ!!!!」

一夏は牙王の言葉に理解し納得してしまう。当然だ。一夏は戦闘処か喧嘩もした事が無い平和ボケした子供。出来損ないと言われても、只々唇をかみしめて泣き寝入りするしかなかった、弱いガキだったのだから……

牙王『だから今お前がすべき事は、ダークライダーの力で戦えるようになるレベルまで鍛え上げる事だ』

一夏「……だけど、どうすればいい?」

牙王『取り敢えず、後は俺が行先まで操縦してやる。お前は、後ろの車両で他のダークライダー達と挨拶して来い。そして、今後どうするかも決めろ』

一夏「はっ?……………うおッ!?!」

牙王がそう言うと、一夏の身体だけがガオウから切り離された。身構える事も出来なかった一夏はガオウストラライカーの横で投げ飛ばされる様に放り出され倒れる。

一夏「イテテ……………えっ!!?!」

強かに打ち付けた腰をさすりながら立ち上がった一夏が目にした

のは、さつきまで自身が跨っていたガオウストライカーに「仮面ライダーガオウ」がまだ跨っているという光景だった。自分はさつきガオウストライカーから投げられた様に離れたのに……一夏（これじゃもう一人の自身が目の前で操縦しているって事に……？）混乱を隠せない一夏。

ガオウ「オイオイ、何混乱してやがんだよ。さつきお前も見ただろ？俺はお前の身体から出て実体を持てるんだ」

一夏「ああ、そうだった」

思い出したかのように納得する一夏。ガオウは呆れたとばかりに溜め息を吐く。

ガオウ「だったら、早く行つて来い」

一夏「ああ 分かった」

一夏はガオウに言われて操縦室から後ろの車両へと足を運ぶ。しかし一夏が見た車両の中には誰も居なかった。だが次の瞬間、一夏の身体から光の塊が幾つも溢れ出て来た。それらは人の形へと変化し、各所に散らばる。それぞれが車両の椅子に自由に座つたり、壁にもたれたりしていた。

中には好戦的な目で一夏を見ている者もいれば、退屈そうにする者、不敵に笑う者、ギラついた目で一夏を見て品定めしている者、一夏に興味もなさげに優雅に寛くわんいでいる者もいる。

——やってやる！どれだけ弱くて挫折して惨めになって絶望する事になっても……俺の目的の為に自反吐を吐いて芋虫みたいに這いずりまっても……絶対に誰よりも強くなつてこの世界を破壊してやる！！！！

——一夏は鍛えられた

ダークライダーの紹介とその過去の振り返り、強くなる為にしてきた

事を思い出す。

不死身の傭兵として構成された戦闘集団のリーダーを務めていた【仮面ライダーエターナル】こと「大道 克己」だいどう かつみ。彼にはそれは厳しく実戦を想定した戦闘訓練をされ、何度も死にかけた。だが、一夏は決して途中で投げ出そうとはしなかった。大道克己はそれを評価して訓練に励んだ一夏に様々な訓練を施した。

大道克己本人は、この程度の地獄は生温い・・・更に深い本当の地獄を見せる為に、更に訓練をさせるとの事で、戦闘訓練に関しては一夏は逆らえないようになっていった事は、ある意味よかったけど哀しい結果であった。

飛行戦闘訓練では、唯一「フライングアタッカー」と言う飛行能力が備わっているバックパックを持つ【仮面ライダーサイガ】こと「レオ」に実戦的な浮遊訓練を受けさせられた。

【仮面ライダーエターナル】も『NASCAR』や『BIRD』のメモリを使用して空中飛行し、【仮面ライダーサイガ】と空中戦をやつて巻き込まれて死ぬかと思つたことは今となつても忘れたくても忘れない出来事である。

会社経営運用や経済的事業等に関しては一時社長を任された【仮面ライダーオーガ】こと「木場 勇治、ゲームコーポレーションというゲーム会社の社長をしていた【仮面ライダーゲンム】こと「檀 黎斗」、そしてその父親でありゲームコーポレーションの創設者でもある【仮面ライダークロノス】こと「檀正宗」だんまさむね、に特に檀親子には連日徹夜で、経済についてを教え込まれた。一種の恐怖も植え付けられてしまったが・・・

ライダーシステムの開発に関しては【仮面ライダーデューク】こと「戦極 凌馬」と、「檀黎斗」というマッドサイエンティスト2人か



ら、一夏を楽しそうに教育した。

2人はいい実験動物を見つけた、という風な眼をしており、それに気づかなかった一夏は、最終的に一種の洗脳を受けたかのようになり、ライダーシステムに関しては狂気に侵された様に嬉々として開発に取り組むようになっていた。2人曰わく、『やりすぎちゃった♪』との事。

【仮面ライダーリユウガ】はミラーワールドの住人で、本人は変身を解除すると一夏の姿をそのまま写した姿であった。彼曰く、彼自身が鏡の様な存在で、一夏の姿をコピーしないと現実世界では実体がもてないそうだ。

リユウガは一夏に自身の契約モンスターである「ドラグブラッカー」を戦わせ、そいつに認めさせて契約させるとの事。

そして永い激闘の末、ドラグブラッカーは一夏を認め、一夏は【仮面ライダーリユウガ】に変身する事が出来るようになった。

リユウガからは、契約出来た事の賞賛と別の事を考えてい件について一夏を伝える。

リユウガ曰く、他のミラーモンスターとも契約し、別の仮面ライダーに変身できるかも知れないとのこと。彼は試しに、ミラーワールドから様々なミラーモンスターを呼び出し、一夏と戦わせた。

すると案の定。一夏は様々なミラーモンスターと契約する事に成功。

鯨型のミラーモンスター《アビスラッシュャー》と《アビスハンマー》その2体が融合し新たなミラーモンスターとなった、メガロドンのようなミラーモンスター《アビソドン》

その《アビソドン》との契約デツキで変身する【仮面ライダー】の名は――

――【仮面ライダーアビス】

コブラ型のミラーモンスター：《ベノスネーカー》

その《ベノスネーカー》との契約デツキで変身する【仮面ライダー】

の名は――

――【仮面ライダー王蛇】

中には契約出来たものの、【仮面ライダー】に変身するよりも契約モンスターだけをそのまま使用する方がいいモノもいた。

エイ型のミラーモンスター：《エビルダイバー》

水中活動だけでなく飛行能力を合わせ持ち、ライダーを乗せての飛行も可能である。エビルウィップやコピーベントを用いたトリックキーな戦いを得意とする。

専用武器は――エビルダイバーを模した鞭型の武器『エビルウィップ』

犀<sup>サイ</sup>型のミラーモンスター：《メタルガラス》

サイなのに二足歩行で巨体を活かした凄まじい突進力を持ち、自身にも頭部のドリル状の角「メタルホーン」や両手の鉤爪「メタルネール」を持つ。頑丈なボディは軽乗用車との正面衝突程度なら難なく耐える。

専用武器は――メタルガラスの頭部を模した角のある突撃盾の様な『メタルホーン』

白虎型のミラーモンスター：《デストワイルダー》

コチラも二足歩行で、特徴はかなり無骨な外見をしていて白地に縞模様。刀のような巨大な爪が武器を持つち、リュウガ曰く、100tの物体を持ち上げるほどの怪力の持ち主だと言う。

専用武器は――デストワイルダーの両腕を模した、巨大な鉤爪『デストクロー』

カメレオン型のミラーモンスター：《バイオグリーザ》

同じく二足歩行で、保護色により周囲の背景に溶け込み、「バイオマウス」と呼ばれる口から最大600mまで伸ばせる長い舌での不意打ちする戦法を得意とするモンスター。また、「バイオスプリング」というバネが逆関節の足の部分に仕込まれている為、高いジャンプ力を有している。

専用武器はホールドベントのヨーヨー型武器バイドワインダーだが、主に「コピーベント」で相手の武器をコピーして戦う。

リュウガはミラーモンスターは他のミラーモンスターのエネルギーもしくは人間の生命や人間自体を餌とする事も伝えた。

それを聞かされた一夏は、女尊男卑の女性を殺しては証拠隠滅の為に食わせたりしていた。

一夏の中で、殺した女尊男卑の死体は人間と思わなくなり、最早……契約ミラーモンスターの餌としか認識しない様になった。

ただ、気になる事もあった。

闇の鎧たる「仮面ライダーダークキバ」を管理している「キバットⅡ世」が『世界の破壊者となるか、世界の救済者となるか楽しみだ』と傍観者の様な事を言っていたのだ。

それからどれだけ時間が経ったのかは解らないが、

一夏は歴代ライダー達に様々な事を教わった。そして今では「出来損ない」と言われ続けられた只のガキの面影は何処にも見当たらず、そこに居るのは数々の人達によって鍛えられた百戦錬磨の戦士であり、

ライダーシステムを開発する研究者兼科学者であり、世界の破壊を目的とする破壊者であった。

そして今現在、一夏はガオウストラライカーの横に立って、マスターパスを握っていた。それは「仮面ライダーガオウ」になる準備でもある。

一夏は少し前の事を思い出していた。それは……

「仮面ライダーコア」から少し借りた「記憶」に関するガイアメモリ

『MEMORY』を使い、とある真実を知る事になった事。

そのとある真実。それは……

『白騎士の搭乗者の正体』

一夏「まさか白騎士の搭乗者の正体が……千冬姉だったなんてな」

一夏は再びガオウライナーへと乗り込み、操縦室のガオウストライカーの隣に立つ。

一夏「変身！」

【GAOH FORM】

一夏は最初にこの操縦室で変身した【仮面ライダーガオウ】となつてガオウライナーキバを操縦する専用バイク『ガオウストライカー』に跨り、マスターパスを挿入し、ガオウライナーキバを起動させる。

仮面越しであるが、一夏の眼には強く覚悟をキメた決意の光が宿っていた。

—— 自身の敵は全て殺す。 ——

—— 例えそれが…… ——

—— 過去に血を分けた姉弟であつても ——

一夏「待ってろよ千冬姉…… いや白騎士！俺が……イヤ、俺達が

！お前等とIS誕生の時間を喰らって、歴史を変えてやる！行くぞ！  
ガオウライナー!!」

—— G A W W W A A A A A A A A A Y Y Y Y Y Y Y Y ——

一夏は神の列車、ガオウライナーをISの始まり女尊男卑の社会の原因となった『白騎士事件』が起こった時間へと走らせる。

ガオウライナーキバも一夏の意志に<sup>い</sup>応える様に、そして<sup>よ</sup>漸く時間が喰えると<sup>ち</sup>歓喜の咆哮を轟かせた。

ガオウライナーは神の路線を走り、<sup>ゲ</sup>時の門の光の入り口へと入り、その姿を過去の時間へと消した。